

憲法と映画(104)『秋が来るとき』

フランス映画

<かな>



皆さんは誰にも言えない秘密はあるでしょうか。墓場まで持っていくと固く心に決めている秘密がありますかということです。傘寿を迎えた主人公の女性・ミシェルにはあるのです。

自然豊かなフランス・ブルゴーニュで一人暮らしを満喫している彼女は、広い敷地で野菜を栽培したりおしゃべりがしたければ車に乗って気の置けない友人・マリーのところに会いに出かける元気なおばあちゃんです。彼女にはシングルマザーとして苦労して育てた一人娘と男の子の孫がいます。久しぶりに帰省の知らせを聞いたミシェルは今か今かと帰りを待ちわび、お菓子を焼いたり近くの森に娘が好きなキノコを採りに出かけ食卓に並べるのです。そこにはどこにでもあるありふれた日常がありました。ところが、キノコ料理を

食べた娘が突然体調不良を起こして救急車で病院へ運ばれますが処置が早く事なきを得ます。そのことを許されない娘はその日に孫を連れてパリに帰ってしまいます。ミシェルは女手一つで生活費を稼ぐため娼婦までしてきた過去が徐々に明らかになってきます。そんな母を許せない気持ちを抱いたまま母娘の関係は、毒キノコ的一件で決定的になってしまいます。

マリーの息子・ヴァンサンはミシェルを許すよう説得するために娘の住むパリのアパートへと単身向かいます。その時娘がベランダから転落する「事故」が起こり、警察の捜査で防犯カメラに風防を被ったヴァンサンらしき男が写っていることが分かります。警察はミシェルに事情を聴くためにやってきますが「その日、ヴァンサンは家の庭仕事を手伝ってくれていた。パリには行っていない。」とウソのアリバイを証言します。残り少ない人生を穏やかに過ごすために彼女が選択した大きな決断でした。

孫を引き取った数年後にヴァンサンと孫そしてミシェルは3人で家の近くの森へ散策に出かけます。2人に逸れたミシェルは、彼女が望んだように森に抱かれて眠るように息を引き取るのです。